

吉備津彦命と鷺の巣温泉

ずーっとずっと昔のこと、竹荘にはぎょうさんの鬼がおったそうなの。

この鬼は、縦社の鬼ノ城の方からやって来て住み着いた。

そして、苦勞して作った作物を荒らしたり、盗んだり、女や子どもをさろうたりと、悪いことばかりしとったと。

村の者は〈こんなことされちゃあ、たまらん〉と、みんなで鬼を退治することにした。
手にくわやら、かまやらを持って、鬼に向かっていったが、鬼の強いこと強いこと。

どうにも歯が立たず、逃げ帰ってきた。村の者は集まって相談した。

「どねえかして、鬼を退治せにやあ、わしらがやられてしまう。

鬼をやっつけるええ方法はねえもんじゃろうか」

すると、一人の年寄りが、

「なんでも、吉備津彦命という、力が強くて神通力を持った偉いお方が、都からやって来て、吉備津(現在の岡山市北区)におられるという。

そのお方に鬼退治をお願いしたらどうじゃろう」

「そりゃあええ、そねえに力が強うて神通力をもっとるお方なら、
きっと鬼どもを退治してくりょう。すぐに頼みに行こう」

さっそく、鬼退治をお願いに行くと、吉備津彦命は快く引き受けてくださった。

しばらくして、竹莊へやって来たのじゃ。

鬼どもが、いつものように村を荒らしにやって来たので、命と鬼どもの戦いになった。鬼どもは強かったが、命が力をふりしぼって戦ったので、次々に傷つき逃げて行った。「もうこれで大丈夫だ」村の者は喜んだと。ところが次の日、前の日と同じように、大勢の鬼どもが戦いにやってくるではないか。

驚いたことに、傷ついた鬼は一人のいない。命たちと鬼どもは一日中戦い、また多くの鬼が傷ついて逃げて行ったのじゃ。

「今度こそは大丈夫だ」と、命は村の者に言った。

ところが、次の日も、次の日も、その次の日も鬼どもは戦いにやって来た。
しかもいっこうに力が弱くならんのじゃと。

その壺

吉備津彦命と鷺の巣温泉

「どうも不思議じゃ。あれだけ鬼に傷を負わせたのに、傷が治っていたり、力が少しも衰えん。これは、きっと何かあるに違いない」

命は、家来に傷ついた鬼のあとをつけて様子を見てくるように命じた。

家来があとをつけて行くと、鬼どもは湯に浸かっていた。

「ああ、ええ気持ちじゃ。この湯はよう効くのう。こねえ深い傷を負うたのに、
いっぺん浸かったらすぐ治る」

「そうじゃ、そうじゃ。傷だけじゃあのうて、気分までようになって、力がわくし、元気が出る」
「ほんまにええ湯じゃ。明日も戦うことが出来るぞ」

湯に浸かって大きな声で話したんじゃない。家来からこの話を聞いた命は、
 〈そういうことだったのか。それなら、湯を止めてしまえば、鬼どもは
 傷を治すことができなくなるだろう〉と、神通力で湯が出ないようにしてしまった。

その次の日から、鬼どもが傷ついても、治すことができず、
とうとう命に退治されてしまったと。

それから、竹荘は、平和で豊かな村になったということじゃ。
鬼が傷を治したという湯は、いまでも竹荘の湯本屋・鷺の巣温泉で
冷泉となってわき出している。

効き目は、昔と同じように、傷によく効くと言われている。

再話 土井 美知枝

【吉備中央町のむかし話 岡山「へその町」の再話集 より抜粋】

その二